

参加者が対面で集いファシリテーターが リモートで参加する 「ハイブリッド PCAGIP」の試み

押江隆・杉原恵美¹・内田貴義²・堀部悦子³・
古屋陽子⁴・中村怜美⁵・福重優里⁶・一木美津子⁷・
久保萌々華⁸・中島利江⁹・藤井美帆¹⁰・藤本夏帆¹¹

The Experiment of “Hybrid PCAGIP”
with On-site Participants and a Remote Facilitator

Takashi Oshie, Megumi Sugihara, Takayoshi Uchita, Etsuko Horibe,
Yoko Furuya, Satomi Nakamura, Yuri Fukushima, Mitsuko Ichiki,
Momoka Kubo, Toshie Nakashima, Miho Fujii and Kaho Fujimoto

要約

本研究では参加者が対面で集いファシリテーターがリモートで参加する「ハイブリッド PCAGIP」を実施し、その録画記録や参加者の感想文から対面 PCAGIP やオンライン PCAGIP（押江ら、2023）との異同を検討した。その結果から、ハイブリッド PCAGIP には「新たな視点と方向性」や「穏やかな風土の実現」といった対面 PCAGIP やオンライン PCAGIP と同様の特徴がみら

¹ 山口県立大津緑洋高等学校大津校舎 ² 山口県立萩総合支援学校

³ 山口県立岩国商業高等学校 ⁴ 山口県立美祢青嶺高等学校

⁵ 山口県立大津緑洋高等学校日置校舎 ⁶ 山口県立大津緑洋高等学校水産校舎

⁷ 山口県立萩商工高等学校 ⁸ 長門高等学校 ⁹ 山口県立萩高等学校

¹⁰ 山口県立宇部高等学校 ¹¹ 成進高等学校

れた一方で、「安心感と仲間の実感」というオンライン PCAGIP にはない特徴がみられたことを示し、遠方によりよい PCAGIP 体験を届けられる可能性をハイブリッド PCAGIP が有していることを論じた。

問題と目的

ビカジップ
PCAGIP 法とは、事例提供者の提出した簡単な事例資料をもとに、ファシリテーター（以下“fac”と記述）と参加者が協力して参加者の力を最大限に引き出し、その経験と知恵から事例提供者に役立つ新しい取り組みの方向や具体的ヒントを見いだしていくプロセスを学ぶグループ体験である（村山，2012b）。PCAGIP 法はこれまで大学や教育、保健・医療、福祉、産業・行政、司法・犯罪といった様々な領域で実践や研究が数多くなされている（上西，2024）。

COVID-19 感染拡大（いわゆる“コロナ禍”）以降、密接・密集・密閉、いわゆる 3 密の回避のために様々な会議がオンラインで行われるようになり、我が国において COVID-19 が 5 類感染症に移行して 3 密回避を求められなくなった 2022 年 5 月以降もあらゆる場面でオンライン会議システムは使われ続けている。

このような時代的背景もあり、PCAGIP 法もオンラインで実施されるようになっている（以下“オンライン PCAGIP”と記述）。

岡本・池田・甲斐・末元・水谷・米田・池見（2021）は、オンライン会議システムの一種である Zoom を用いて PCAGIP 法を実施し、そのメリットとして随時全員の表情を画面上で真正面からとらえることができ、対面にはない臨場感のあること等を、デメリットとしてマイクをオンにしたままセッションを行うことで生活音が混入すること等を挙げている。

また押江・石川・岩野・葉柴・堺・高橋・柳原（2023）は、オンライン会議システムの一種である Webex を用いて PCAGIP 法を実施し、オンライン PCAGIP が多様な参加者を獲得できる可能性を有している一方で、身体性の欠如したテレプレゼンスを前提としており、それはもはや PCAGIP 法そのものではないかもしれないこと等を論じている。

さらに内藤（2023）は対面による PCAGIP 法（以下“対面 PCAGIP”と記述）とオンライン PCAGIP それぞれの効果を数量的に比較検討し、オンライ

ン PCAGIP は対面による PCAGIP 法と比べて「理解・発見」得点が高く「受容的雰囲気」得点が低いことを示したうえで、オンライン PCAGIP では「頭」で考える思考的なプロセスは促されるが、「心」で感じるところが伝わりにくいことを論じている。

このように、コロナ禍以降、オンライン PCAGIP についてこれまで様々な実践や研究がなされている。

ところで筆者らは、対面 PCAGIP とオンライン PCAGIP を組み合わせたハイブリッド形式とでもいうような PCAGIP 法（以下“ハイブリッド PCAGIP”と記述）の必要に迫られた。第2～12 筆者はある地区の養護教諭協議会に所属しており、この協議会で実施する午前と午後の研修会のうち、午後の部で PCAGIP 法の fac を引き受けてほしいと、遠方に在住の第1 筆者に依頼があった。本研修会の目的は「①共創のプロセスを学ぶこと。PCAGIP 法そのものを現場で実践するというよりは、共創のエッセンスを持ち帰ってもらい、各自現場で活用していただくこと」、「②そのためにパーソン・センタード・アプローチ（以下“PCA”と記述）の風土を体験すること」の2 点であった。

参加者は午前中にはほぼ全員が会場の学校に対面で集合しており（ただし1 名は午前欠席で午後よりリモート参加）、また第1 筆者は現地に集合するのが難しく、fac と1 名の参加者がリモートで、その他の10 名の参加者が対面で集まるという状況で PCAGIP 法の実施を求められるかたちとなった。

このようなハイブリッド PCAGIP はこれまで報告されていない。全員がオンライン参加のオンライン PCAGIP について押江ら（2023）は「『参加者が同じ空間を共有していない』という対面 PCAGIP との決定的な違いがある」こと、また「多くの参加者が自分のことを一生懸命考えてくれるその熱量や空気感そのものが心理的な支えになっている可能性が高い」ことを指摘している。では、ほぼすべての参加者が同室に集まるハイブリッド PCAGIP ではどうだろうか。fac が同室にいないことは、ファシリテーションやプロセス、参加者の体験等にどのような影響を及ぼすのだろうか。そもそもハイブリッド PCAGIP はどのように実現すればよいのだろうか。

そこで本研究では、筆者らが試行錯誤しながら実施したハイブリッド

PCAGIP の手続きやセッションの内容および参加者からの感想を報告し、この形式がセッションの展開および参加者の体験にどのように影響をもたらすのか、対面 PCAGIP およびオンライン PCAGIP と比較しながら論じることを目的とする。

方法

ハイブリッド PCAGIP の手続き

(1) 会場および機材の設置

事例提供者にはタブレットを 1 台、他参加者は 2 名につきタブレットを 1 台用意し、全員の表情がカメラに映るようにした。また同室にいない fac やリモート参加者も、一緒にいる雰囲気を出すために、電子黒板やタブレットを設置して表示した。輪になるように机を配置して中央にスピーカーホンを設置し、音声の出力と入力共にスピーカーホンで一括して行った（図 1・2）。記録には Zoom のホワイトボード機能を使用し、全員が確認できるようにした。

(2) 参加者

事例提供者を参加者のうち 1 名が、fac をリモート参加の第 1 筆者が、記録係を参加者のうち 3 名が務めた。記録係の 3 名のうち 2 名は Zoom のホワイトボードに記録し、1 名は手書きでメモをとってホワイトボードの記録を補助した。その他の参加者は 7 名（うち 1 名はリモート参加）であった。なお、参加者は fac 以外全員養護教諭であった。

(3) 事例の募集

事例については事前に第 1 筆者がオンラインフォーム作成ツールの一種である Google フォームを使用してオンラインで募り、あらかじめ事例提供候補者を選出した。

(4) 研修会の流れ

本研修会の前半では第 1 筆者が先述した本研修会の目的および PCAGIP 法の進め方を概説した。その後、第 1 筆者が事前に選出した候補者に事例提供者を引き受けてもらえるか確認して了承を得たうえで、PCAGIP 法のセッションをハイブリッド形式で実施した。

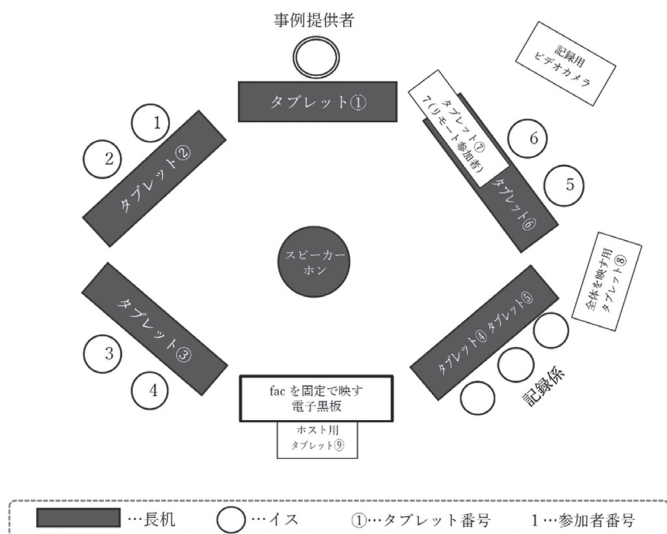


図1 会場の見取り図



図2 会場の様子

データ収集の手続き

事例提供者を含む参加者全員に録画の許可を得た。録画はZoomの録画機能と、会場にビデオカメラを設置し全体の様子もあわせて撮影を行った。またセッション終了後、自由記述のアンケート調査をオンラインにて実施した。アンケート調査では「PCAGIP法を体験した感想」, 「ハイブリットでPCAGIP法

を体験した感想（良かった点やオンラインで実施することのメリット等）」、「ハイブリッドでPCAGIP法を体験した感想（問題点）」を尋ねた。

結果

本セッションの概要

録画記録をもとに、ハイブリッドPCAGIPのセッションの概要を示す。なお、個人情報保護のため、個人を特定されるおそれのある情報は改変して記述する。

まずfacより事例提供者に提出資料を読み上げながら簡単に説明するよう求めた。事例は「ある生徒Aの相談や行動の背景に教師Bの不適切であると感じられる指導が背景にあることに気づくことがある。生徒Aの保護者から保健室に相談が寄せられることもある。教師Bから配慮や理解が得られると嬉しい」といったものであった。

次に第1ラウンドに入った。第1ラウンドでは、全員が順番を決めて質問した。なお、リモート参加のfacにとっては第1ラウンドで質問する順番がわかりづらいため、あらかじめ各参加者に番号を割り振り、その順番で質問してもらうよう工夫した（図1）。事例提供者は参加者からの質問に答えながら、生徒Aや保護者と教師Bとの関係性について話していった。1周目の質問が終わり、facはホワイトボードの記録を確認しながら、事例提供者自身も教師Bとの関わりで苦慮していることを取り上げる。

ここでもう1周質問を募ることにした。生徒AはAで指導の必要な場面があること、一方Aなりに頑張っているのをそれを大事にしてあげたいこと、友人関係が必ずしも良好ではないこと、そのAは「自分だけわかってもらえない」という思いを持っていたのではということに気づいたことを語る。さらに記録係からも質問があった。

このタイミングでfacが、これまでのたくさんの質問を受けて感じたことを事例提供者に話すよう促したところ、学校に1人しかいない養護教諭として生徒の思いを大切にしたいという点は譲れないこと、だからこそもどかしさを感じていること、その他の場面で生徒はどんな様子なのかもっと見ておくことが大切だと感じたこと等を話す。facがここでさらにどのような話ができたらよ

いと思うかを事例提供者に尋ねたところ、他の学校の先生方の経験や対応を聞いてみたいと話す。

次に順番を決めずに自由に質問する第2ラウンドに入ろうと fac が提案し、了承を得る。ここでリモートの参加者から「周りの雰囲気かわからないので、いつお話ししていいかわからなくてすみません。もし、どなたかがいま発言しようと思って手を挙げられていたらすみません」と発言があり、会場より「大丈夫です」と応答がある。続けて「自分にも似たような経験があった。そのときは自分が話しやすい先生と話すようにしていた。そうすることで、自分の味方だけでなくその生徒の味方を増やすことにもつながった」との意見や、生徒 A の家庭環境についての質問があった。ここで fac が「事例提供者が A のお母さんみたいと感じた。事例提供者がこの生徒をすごく支えているように思う。だからこそのもどかしさなのだろうと思う」等と伝えた。さらに参加者から「B 先生のいいなと思うところはあるか」と質問があり、「B 先生が悪役みたいになってる」と会場に笑いが起こる。事例提供者より「面倒見のいいリーダーシップのとれる先生だ」という返事がある。その他、学校教員を対象とした人権教育の状況等について質問があった。加えて「生徒 A のいいところ」について質問があり、頑張り屋であること、しかしその姿勢が周りに伝わりづらいこと等が話し合われた。

終了時刻が近づき、事例提供者から「自分の養護教諭としての立場をしっかりと持たなければいけないという思いがあり、B 先生に伝わらないというところが苦しかった事例でもあった。みなさんにいろいろ質問してもらってありがたい意見をもらえた。ありがとうございました」という言葉があった。これを受けてセッションを終えた。この後 PCAGIP 法にかかわる質疑応答等があった。

以上が本セッションの概要である。本セッションでは時折会場（学校）のスピーカーからチャイム音が流れた。対面の参加者にとってはそれほど大きな音ではなかったが、リモート参加の fac および参加者にとってはやや大きい音が鳴り響き、何度かセッションが中断した。その他にもリモート参加者側にとっては聞き取りづらい場面が何度かあった。

また全体を映すカメラを設置していたものの、リモート参加の fac 側にはき

わめて小さいサイズで表示されており、全体の雰囲気を把握するのが難しかった。目線が送れず、facが誰に向けて話しているのかわかりづらい場面もあった。facとしては「つかみきれない」感触が最後まで残った。1名のリモート参加者からは「どのタイミングで話しかけてよいかわかりづらかった」との意見もあった。

このような聞こえづらさや伝わりづらさがある一方で、リモート参加者に「聞こえていますか?」、「画面見えていますか?」といったさりげない声かけがある等、補足したり発言を促しあったりする場面が何度もみられた。またセッション後の質疑応答の際、リモート参加者から「発言の合間に聞こえてくる音で雰囲気が伝わってくるっていうか、一体感の1つの役割になっているかなと思った」、「事例提供者の支えになってあげたいという安心感やいい雰囲気が離れた場所にいっても伝わってきて心地よかった。信頼関係が生徒にもプラスに伝わっていくと思うので、こういう関係を大事にしたいと思った」との発言があった。

参加者の感想

セッション終了後に実施したアンケート調査の結果を、KJ法（川喜多，1967）を参考に分析し、表1に示した。62枚のカードが分析対象となった。以下表1をもとに、大分類を【】で、中分類を《》で、小分類を〈〉で、それぞれのラベルを〔〕で、カードの内容例を「」で記述する。

(1) PCAGIP法の手続き

まず【PCAGIP法の手続き】について、〔助言より質問〕をする点が話しやすい、〔エンカウンター風〕のスタンスで参加したという《PCAGIP法の構造》に関する感想や、《グランドルール》に関する感想がみられた。

《グランドルール》については「批判しない」ルールによる穏やかな雰囲気や〈グランドルールによるよい雰囲気〉、〈批判せず尊重する〉といった〈穏やかな風土の実現〉に関する声がある一方で、「事例提供者の立場として、批判されているようには感じられなかったのか、実際にどのように感じられたのかとても気になる」といった「事例提供者への配慮」や、「自分が話したことが

表1 参加者の感想

大分類	中分類	小分類	ラベル
PCAGIP 法の 手続き	PCAGIP 法の構 造		助言より質問、エンカウンター風
	グランドルール	穏やかな風土の 実現	「批判しない」ルールによる穏やかな雰囲気、 グランドルールによるよい雰囲気、批判せず尊 重する
		グランドルール が守れたか心配	事例提供者への配慮、グランドルールが守れた か不安
	今後できる工夫		記録係の工夫、設営の工夫、人数を絞ったほう がよい
PCAGIP 法の 体験	PCAGIP 法の効 果	安心感と仲間の 実感	仲間がいることを実感、安心感と温かさ、「一 人じゃない」と勇気もらえる、安心して話せ た、安心して学べた、仲間が同じ空間で同じ問 題に向かって考える時間が大切
		新たな視点と方 向性	違った視点、多角的な視点、新たな視点で流れ が変わった、新たな視点への気づき、これから のヒントが生まれる、共創の学び、受容と進展
	現場での活用		現場で確認を活かす、現場でグループを活かす、 現場でエッセンスを活用、実際の課題に対応し づらい
ハイブリッド PCAGIP の特徴	遠方でも参加で きる		遠方でも参加できる
	参加できる人が 広がる		参加できる人が広がる
	ハイブリッドな らではの特徴	和やかで話しや すい雰囲気	思ったほど問題はなかった、違和感なく話せた、 オンラインならではの間、リモートと対面の垣 根を超える一体感、リモート参加でも伝わる柔 らかさ、和やかな雰囲気を作りやすい
		空間の非共有	雰囲気の感じ方の違い、空気感がつかみにくい、 声が届いているか気になる、声が届いているか 不安、全体の雰囲気がわからない、fac が誰に 質問しているのかわからない、表情が読み取れ ない、リモート参加では余韻に浸れない、離れ 小島が安心
	設営の負担		設営の負担
	機材の学び		機材の学び

事例提供者を否定する発言になってしまったのではないかと後で気になった」といった〔グランドルールが守れたか不安〕といった〈グランドルールが守れたか心配〉だとする感想があった。

《今後できる工夫》として「記録者は Zoom のホワイトボードが 2 人、手書きが 1 人という体制で実施したが、的確な人数だと感じた」といった〔記録係の工夫〕や、「会場設営や機材の位置、リモート画面設定等をもっと工夫する

ことで改善できる」といった〔設営の工夫〕,「順番が回ってくるまで集中力が途切れてしまった。もっと人数を絞ったほうが, 参加者同士の交流が生まれるのではないかと感じた」といった声〔人数を絞ったほうがよい〕があった。

(2) PCAGIP 法の体験

次に【PCAGIP 法の体験】について, 〈安心感と仲間の実感〉や〈新たな視点と方向性〉からなる《PCAGIP 法の効果》および PCAGIP 法の《現場での活用》に関する感想があった。

〈安心感と仲間の実感〉には〔仲間がいることを実感〕できた, 養護教諭同士で〔安心感と温かさ〕を感じた, 事例提供者が〔「一人じゃない」と勇気もらえる〕, fac のファシリテーションにより〔安心して話せた〕, 結論を出さなくてよく〔批判しない〕ルールのおかげで〔安心して学べた〕, 〔仲間が同じ空間で同じ問題に向かって考える時間が大切〕でこの雰囲気が子どもたちに波及すると思う, といった意見があった。

また〈新たな視点と方向性〉には, 〔違った視点〕に目を向けて事例を振り返った, 〔多角的な視点〕を学べた, 「友人関係を視野に入れた質問があったとき流れが変わったと感じた」という〔新たな視点で流れが変わった〕, 参加者全員で事例の解像度を上げていった結果〔新たな視点への気づき〕が生まれた, 「結論はあまり求めずこれからのヒントが生まれ, また受け取り手で様々な解釈が生まれる」という〔これからのヒントが生まれる〕, 「事例提供者をとりまく人がみな『(上下関係なく) 凡人である』とおしなべて参加する意識こそが日常にも必要だろうと感じた」, 「何人かが集まればより良い意見, なるほどと思う意見が出て勉強になった」とする〔共創の学び〕, 「事例提供者がこれまでの取り組みや考えを認められて, これからの方向性が見えてくるものになっていた」という〔受容と進展〕といった感想があった。

PCAGIP 法の《現場での活用》については, 「たとえば保健室に悩みを抱えてきた先生がいたとして, 雑談する中で最終的に『先生の中で何かヒントや新しい視点があった?』と確認するとよい」というような〔現場で確認を活かす〕, 「『次は〇〇先生も入れて話してみよう』などと, 1 回で何かしようとしなくてもいいのではと思う」といった〔現場でグループを活かす〕, 「事例提供

者を絶対に批判しない、結論が出なくてもヒントが見つければよい、事例提供者が元気になることが目標、分からないから一緒に考えようというスタンス等のPCAGIP法のエッセンスは、実際に日常業務の中で生徒や他教員から相談を受けた際に活用することができると感じた」という〔現場でエッセンスを活用〕といった意見があった。一方で「実際の課題をこれからどうしていくか協議していく際に（PCAGIP法を）取り入れるのは難しいように感じた」という意見もあった（〔実際の課題に対応しづらい〕）。

(3) ハイブリッドPCAGIPの特徴

さらに【ハイブリッドPCAGIPの特徴】として「講師の方や会場に集まらない人も参加できること」や「遠方からや業務の合間をぬって参加できることはとてもメリットだと感じる」等《遠方でも参加できる》とする声があった。《遠方でも参加できる》おかげで《参加できる人が広がる》といった声もあった。一方で「機材や会場の準備をしてくださる方の負担が大きい」ことや、「機材の設営にかかわる者はリモートの設定や画面の見え方、機材が上手く動いているか等が常に気になり研修自体に集中できないので、参加者にはカウントしないほうがよい」といった《設営の負担》にかかわる感想があった。

《ハイブリッドならではの特徴》として〈和やかで話しやすい雰囲気〉と〈空間の非共有〉に関する意見があった。まず〈和やかで話しやすい雰囲気〉について、「音声の時差や空気が伝わりづらいなどの懸念点を想定していたが、思ったほどの問題ではなく、ハイブリッド形式でも『みんなで一緒にヒントを見出す』時間が作れたのではないかと思う」という〔思ったほど問題はなかった〕や、「会場にいた側としては、あまり違和感なく話をすることができた」という〔違和感なく話せた〕といった感想がみられた。〔オンラインならではの間〕が生まれることで「不便さはあるがそこに笑いも生まれる」といった意見や〔リモートと対面の垣根を超える一体感〕があったという感想があった。さらに「リモート参加で会場の雰囲気が感じ取れるか不安もあったが、時々もれてくる声から柔らかいものを感じ、スッと入っていくことができた」という〔リモート参加でも伝わる柔らかさ〕や、「完全オンラインでは全体の雰囲気作りがとても難しいと思うが、今回のハイブリット式では参加者の多くが会場に

集まっていたので、会場内では和やかな雰囲気を作れていたと思う。リモート参加者とその会場の雰囲気を完全に共有することはどうしても難しかったと思われるが、全く参加できないよりは伝わったと思う」という〔和やかな雰囲気を作りやすい〕といった意見があった。

〈空間の非共有〉については「会場にいた人とそうでない人では雰囲気を感じ方に差があるように感じた」という〔雰囲気を感じ方の違い〕や、リモート参加者は〔空気感がつかみにくい〕だろうと感じた、〔声が届いているか気になる〕、といった声もあった。

同じく〈空間の非共有〉についてリモート参加者からは〔声が届いているか不安〕という声に加えて、ホワイトボードしか見えず〔全体の雰囲気がわからない〕ので「いつ発言したらよいかわからなかった」、〔facが誰に質問しているのかわからない〕ことがあった、〔表情が読み取れない〕ので「自分が発した発言が相手にどう受け止められているかわかりにくかった」、〔別空間からの参加であったため実施後の余韻に仲間とひたることができず残念だった（〔リモート参加では余韻にひたれない〕）〕といった感想があった。一方で「（リモート参加の）私は少し照れ屋などところがあるので〔離れ小島が安心〕する空間でもあった」という声もあった。

考察

本研究の目的は、ハイブリッドPCAGIPの形式がセッションの展開および参加者の体験にどのように影響をもたらすのか、対面PCAGIPおよびオンラインPCAGIPと比較しながら論じることであった。以下、ハイブリッドPCAGIPの特徴について考察する。

新たな視点と方向性

ハイブリッドPCAGIPでは「結論はあまり求めずこれからのヒントが生まれ、また受け取り手で様々な解釈が生まれる（〔これからのヒントが生まれる〕）」や「事例提供者がこれまでの取り組みや考えを認められて、これからの方向性が見えてくるものになっていた（〔受容と進展〕）」等の《新たな視点と

方向性》に関する感想が寄せられた（表 1）。

新たな視点と方向性がもたらされる点は、対面 PCAGIP やオンライン PCAGIP でもしばしば指摘されている。たとえば村山（2012a）は対面 PCAGIP について「事例提供者が予想もしない多様な視点が出てきて、それが事例提供者にとって新鮮なヒントになることが多い」と述べている。またオンライン PCAGIP でも多角的な視点が提供されたことが報告されている（押江ら，2023）。

穏やかな風土の実現

またグランドルールによる〈穏やかな風土の実現〉も、対面 PCAGIP でしばしば指摘されるものである。村山（2012a）は「事例提供者を批判しない」グランドルールの目的について、「事例提供をすることになったら、誰でもどきどきしたり、緊張したり、批判されないかと不安に思うものである。人間は、安心できる場でないと十分な自己表現はできない」と述べている。

オンライン PCAGIP についても参加者から「事例提供者の負担をグループの受容的な風土が軽減させていた」という感想があったことが報告されている（押江ら，2023）。

安心感と仲間の実感と身体性

ハイブリッド PCAGIP では〈安心感と仲間の実感〉についての感想があった。たとえば〔仲間がいることを実感〕できた、養護教諭同士で〔安心感と温かさ〕を感じた、事例提供者が〔「一人じゃない」と勇気をもらえる〕、〔仲間が同じ空間で同じ問題に向かって考える時間が大切〕といった声があった。実際のセッション中も、会場に笑いが起こったり、補足したり発言を促しあったりする等、〈安心感と仲間の実感〉を思わせる場面が何度もみられた。

このような感想は押江ら（2023）のオンライン PCAGIP では報告されていない。対面 PCAGIP とオンライン PCAGIP の両方を経験した参加者は、両者の異同について、対面 PCAGIP だと「同じ空間にいる、目が合うだけで一員であるという感覚」があり「一緒になって考えやすかった」が「オンライ

ン PCAGIP では一緒になって考えることが難しかった」という感想や、「対面 PCAGIP の場合、他の参加者が頷く等の反応が見られ、事例提供者に寄り添って考えているように思えた」がオンライン PCAGIP では「全員の表情が見えなかったり、記録ばかりに注目がいったりする」ため「作業的な検討にもなりかねない感じがした」等といった感想を報告している（押江ら、2023）。

このことは、身体性の違いによるものと思われる。押江ら（2023）はパーソン・センタード・アプローチの条件である共感的理解がきわめて身体的な営みであることを述べたうえで、参加者が別々の部屋から参加し空間を共有しないオンライン PCAGIP では「目と目が合う」、「みんなが頷いている様子が見える」といった身体性が欠如し、対面 PCAGIP とは大きく体験が異なることを論じている。内藤（2023）は「オンライン PCAGIP では『頭』で考える思考的なプロセスは促されるが、『心』で感じるところが伝わりにくい」と述べているが、これはまさに身体性の欠如によるものと考えられる。

ではハイブリッド PCAGIP ではどうだろうか。確かにハイブリッド PCAGIP でも会場参加者とリモート参加者で「雰囲気を感じ方の違い」があるといった感想や、リモート参加者は「全体の雰囲気がわからない」、「表情が読み取れない」等の〈空間の非共有〉に関する感想があった。一方で、会場参加者から「思ったほど問題はなかった」、「違和感なく話せた」といった声や、「オンラインならではの間」によりむしろ笑いが生まれるといった意見、さらには「リモートと対面の垣根を超える一体感」といった〈和やかで話しやすい雰囲気〉に関する感想もあった（表 1）。この〈和やかで話しやすい雰囲気〉が「一人じゃない」と勇気をもらえる」等といった〈安心感と仲間の実感〉をもたらし、たとえ考えられる。ではハイブリッド PCAGIP のいったい何が〈和やかで話しやすい雰囲気〉を実現しているのだろうか。

押江ら（2023）は対面 PCAGIP について「事例提供者にとってはそこで何が話されたかだけでなく、多くの参加者が自分のことを一生懸命考えてくれるその熱量や空気感そのものが心理的な支えになっている可能性が高い」ことを論じている。このような身体性による「熱量や空気感」をハイブリッド PCAGIP では対面で会場に集う参加者たちが実現していたと考えられる。

では会場に集わないリモート参加者についてはどうだろうか。セッション中、会場参加者と空間を共有しないリモート参加者から「周りの雰囲気かわからないので、いつお話ししていいかわからなくてすみません」といった発言があった。一方でリモート参加者は「発言の合間に聞こえてくる音で雰囲気が伝わってくるっていうか、一体感の1つの役割になっているかなと思った」、 「事例提供者の支えになってあげたいという安心感やいい雰囲気が離れた場所においても伝わってきて心地よかった」等とセッション終了後に述べている。

押江（2024）は「カメラやマイク、インターネットの回線は、参加者の声や姿は届けても、（グループの参加者が同じ空間に「いる」ことである）プレゼンスまでは届けてくれないようである」と述べているが、本研究の結果はそうとはいきれないことを示唆している。それはプレゼンスをまったく「届けられない」のでは必ずしもなく、どちらかといえば複数の参加者のプレゼンスを「重ね合わせづらい」といったほうが正確なのかもしれない。

会場参加者とリモート参加者が空間を共有しないことによる利点もあった。本研究では「（リモート参加の）私は少し照れ屋なところがあるので〔離れ小島が安心〕する空間でもあった」という声がみられた（表1）。オンラインPCAGIPでも「オンラインだと緊張しづらい」という感想が寄せられており（押江ら，2023），この点は共通しているといえる。ただしオンラインPCAGIPには「緊張しづらいためかえって真剣になりづらい」という声もあり，その質感はハイブリッドPCAGIPと性質を異にする。ハイブリッドPCAGIPにおいてリモート参加者が「離れ小島が安心」だと感じられるという状況は，別々でありながらつながれる感覚を大切にする「バラバラで一緒（村山，2014）」というPCAグループの実践仮説を実現したものといえるかもしれない。

ハイブリッドPCAGIPのファシリテーション

リモート参加者も含めて「バラバラで一緒」とでもいうべき状況が生まれたのはセッション中，会場参加者からリモート参加者に「聞こえていますか？」，「画面見えていますか？」といった声かけが何度もみられたことによるものである。このことは，参加者が全員養護教諭で同じ協議会に所属していたことが大

きいだろう。今後ハイブリッドPCAGIPにおいて、もし参加者からこのような声かけがみられなかった場合は、fac が率先してこのような声かけをする必要があるだろう。ただし fac 自身がリモートで参加する状況では会場参加者に fac の声かけが届きづらい可能性もあり、ファシリテーションに検討の余地があるといえる。

また、セッションでは fac にグループ全体の雰囲気をつかみきれない」感触が最後まで残った。リモートで参加する以上、fac が「つかみきれない」のはある程度致し方ないだろう。このような状況におけるファシリテーションの工夫がありうるかもしれない。またさらにグループ全体の様子が fac に見えるような「設営の工夫」をする（表1）ことによって fac が「つかみきれない」問題はある程度緩和されるかもしれない。

今後の課題

本研究ではオンラインの状況は複数の参加者のプレゼンスを「届けられない」のではなく「重ね合わせづらい」可能性があることを論じたが、なぜそのようなことになるのか、さらなる検討が必要である。そのためには身体論からのアプローチが必要となるだろう。

また、リモート参加者が孤立せずむしろ「離れ小島が安心」だと感じられる状況が生まれるためのファシリテーションや、リモートで参加する fac がグループ全体の雰囲気を「つかみきれない」際に求められるファシリテーションやそれを軽減する「設営の工夫」について、さらなる検討が必要である。そのためには、さらなる実践研究が必要となるだろう。

ハイブリッドPCAGIPは《設営の負担》が大きくファシリテーションにもさらなる工夫が求められるが、身体性が欠如しがちなオンラインPCAGIPとは異なり、対面PCAGIPにより近いグループ体験を参加者に提供しうる可能性が示唆される。fac が遠方に居住している場合はもちろん、被災地や紛争地域といった fac が足を運ぶのが難しい場所に、よりよいPCAGIP体験を届けられる可能性を有した方法といえるだろう。

文献

- 川喜田 二郎 (1967). 発想法 中公新書
- 村山 正治 (2012a). PCAGIP 法とは何か 村山 正治・中田 行重 (著) 新しい事例検討法 PCAGIP 入門－パーソン・センタード・アプローチの視点から－ (pp.12-21) 創元社
- 村山 正治 (2012b). PCAGIP 法の手順とポイント 村山 正治・中田 行重 (著) 新しい事例検討法 PCAGIP 入門－パーソン・センタード・アプローチの視点から－ (pp.22-33) 創元社
- 村山 正治 (2014). PCA グループの理論と実際 村山 正治 (編著) 「自分らしさ」を認める PCA グループ入門－新しいエンカウンターグループ法－ (pp.12-26) 創元社
- 内藤 裕子 (2023). オンラインによる PCAGIP 法の試み－効果尺度を用いた対面との比較検討－ 東北福祉大学教職研究, 2022, 27-35. <https://doi.org/10.57314/0002000011>
- 岡本 和磨・池田 陽子・甲斐 朱莉・末元 真子・水谷 晴香・米田 紗菜・池見 陽 (2021). Zoom を用いた PCAGIP－その実施と有効性の検討－ サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要, 11, 11-19. <https://doi.org/10.32286/00025301>
- 押江 隆 (2024). リフレキシブ PCAGIP とオンライン PCAGIP 村山 正治・中田 行重 (著) PCAGIP 法の実践－対人援助職を支える新しいパラダイム－ (pp.125-130) 創元社
- 押江 隆・石川 智香子・岩野 光・葉柴 由佳・堺 香穂・高橋 亨輔・柳原 真子 (2023). オンライン PCAGIP の実践と検討 山口大学教育学部研究論叢, 72, 43-51.
- 上西 裕之 (2024). PCAGIP 法の研究 村山 正治・中田 行重 (著) PCAGIP 法の実践－対人援助職を支える新しいパラダイム－ (pp.162-172) 創元社